
東方娛樂記

からくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方娛樂記

【Nコード】

N6837Y

【作者名】

からくり

【あらすじ】

幻想郷に幻想入りしてしまった嘘つきの少年が、変てこな能力手にしてフラグ建てまくりながら生きていくお話。外で死を望んだ少年は幻想郷でどのように生きていくのか。嘘が真に変わり、真が嘘に変わる——舌先三寸で俺は生きていく。

一話 嘔吐きの幻想入り（前書き）

隙間妖怪&脇巫女&オリ主

一話 嘔吐きの幻想入り

「……ああ、すみません、説明長すぎてほとんど聞いてませんでした」

「……三時間もの間説明をしていた私の苦労はどうなるのかしら？」

「得意の隙間にも埋めてみればいいんじゃないですかね？」

軽口を叩きながら、目の前に置かれたマグカップを取り中に入っていたお茶を啜る。渋くて美味かった。いやお茶の味なんて知らないけど。知ってるのは結構久しぶりのお茶を飲んだってだけだけど。

「……ああもう、調子が狂うわ」

「じゃあ簡潔に俺がどうなったか教えてください」

「貴方は死を望んだ。だから私がここに連れてきた。ここは幻想郷。人と化け物が共存している。貴方は人としてここに来了。今貴方は博霊神社に居るっ！ どうよ！ 簡潔でしょ！ ちなみに私は幻想郷の管理人なのよ！」

「はい最後以外は簡潔でしたね。ありがとうございます」

悔しそうに顔を歪める化け物……とは思えないほど可愛いというより魅力的な女性。一時間前までは妖艶に微笑んでいたのに、どうしてこんなにも変わってしまったのか。俺には理解出来ない。

「貴方のせいよ！」 「心読むな」

——とはいえ、そうか。確かに俺は死にたかったけれど、まさか生かされるとは思っていなかった。正直言って迷惑極まりない。と、思ってたけれど、話を聞く限りだここは俺みたいな捻くれ者の天邪鬼でも普通に住める場所らしい。

しかし実際にここで生活するかは知らないけど。

「話聞いてたんじゃないの！」 「心を読むな！ 次読んだら二度と喋らねえからな！」

おっと声が荒んだ。人をからかう時には決して素を見せちゃ駄目っていうのは教わったはずんだけどなあ。何て思ってたら睨まれた。成る程これも中々ありか。って何危ない思考してんだよ俺。

「……貴方本当に十六歳？」

「ところで貴方は何さ——」 言いきったら死にそうな気がした。というより殺されそうな気がした。やはり女性に歳など聞くべきではないか。

いや、でも確かこの場所が出来たのが——逆算してみた。驚いた。思わず仰け反った。隙間妖怪でありここの管理人でもある目の前の紫さんでさえ、その反応に溜息を吐いていた。はっはっは、笑えちゃう。

……笑った瞬間に殺気飛ばされるってどうゆう事だよ。誰か説明しておくれよ。なあ殺気飛ばした張本人である紫さんよ、答えておくれよ。

「そうね、人をおちよくりすぎだから」

「はい読んだね今心読んだね！　ごめんなさいって言うまで喋らねえかんね！」

「……………ごめんなさい」 「その表情グッジョブです！」 「うううううっ！」

何かもの凄く悔しそうな表情で唸っているのは無視する。金髪美女があそこまで可愛い表情見せてくれたんだからラッキーラッキー。例え嫌われようとも俺はめげない事にする。

「……別に嫌っちゃいないんだけどね」 「うーん、今の独り言見逃してやる」

おっと顔赤くなった。これはシャッターチャンス、だが残念カメラがない！　畜生俺の馬鹿野郎。……しかし中々、こんな管理人が居る位の所なんだから、俺が居ても遜色は無いだろう。

永住しちまうかな。とか甘い事を考えてみる。だが実際甘くも無い。能力も無いし力も無いけれど——人里とか言うところなら俺は暮らしていけるだろう。

——だけどそれはつまらない。そんな安全など望んじやいない。俺にとって、安全とは逃げるって事と同じだ。それは嫌だ。それは死んだ方がマシ。安全とかならあの世界に居ても変わらないんだ。それなら死ぬ可能性があろうとも、危険を望みたい。

危ない思考だと、自分でも分かっている。紫さんは何も言わない。何も言わないで、静かに茶を啜った。空気が読めるんだろう。成る程、気を抜いたら惚れちゃいそうだ。いやもう惚れてる。

「話は終わった？」

襖の開く音と同時に聞こえた背後からの声に、思わず振り向きそうになる。確か声の主はこの巫女である博麗霊夢さんだったはずだ。俺の記憶力に間違いがなければ、そのはず。

「ええ、大分纏まったわよ」

「そう、なら良かった」

どこが纏まったのか……いや一応纏めてくれたか。俺が理解していないという選択肢はないようで、どうやら随分最初に言われた気がする『理解しないと駄目だからね』という言葉は本当だったらしい。危うく駄目になる所だった。

再びマグカップを手に取り、茶を啜った。和室にあった畳の香りと共に茶の香りが漂ってくる。いや茶の事なんてしらないけどね。

「お茶菓子あるけど食べる？」

「貰うわ」「遠慮しておきます」

「……紫、ちょっと遠慮っていう言葉を覚えた方良いわよ？」

「っ、うるさいわね！ いいじゃない別に！」

そんな紫さんの口調に、思わず驚いた顔を見せる霊夢さんが居た。おーい、紫さんや、口調が完全に狂ってますよ。あの妖艶な感じの紫さんはどこに行ったんだい。

思った瞬間、紫さんは開いた扇子を口元に持っていた。

「……相当崩されたようね、紫」

「ちょっと落ち着きを無くしただけですわ」

そう言って目元だけで妖しく笑い、誘い込むような視線を浴びせてきた為、ちよつとばかし心が揺れた。成る程やはり、美女のその表情は男の理性を崩しにかかるようだ。崩れるような俺じゃないけど。

と——いうよりも、さてはて、どうしたものか。とりあえず面白そうな人達がいっぱい居る場所ってのは分かったし、じゃあここに住んじやおうって思ってる俺が居るのも把握している。

が、どこに住む。人里には住みたくない。お断りだ。人里って所に行ったらもう二度と旅というかそんな感じの事は出来ないらしい……妖怪を倒せる能力があればオーケーらしいが。

……霊力やら魔力やら人間が持てる力は俺に無いらしい。それは巫女さんに言われた。霊夢さんに最初聞いたら諦めなさいってバツサリ切られた。

——じゃあ、諦めるか？ まさか、笑える。諦めるなんてそんな事をするつもりはない。

「——紫さん、能力を知りたいんですけど」

「あら、能力持ちの外来人なんてそうそう生まれないわよ？」

「知ってます——そんな事は知ってますとも」

「……そう、ね。貴方みたいな方が安全に人里で暮らしていたら、私としても貴方としてもつまらないわよねえ」

言って、扇子の中の表情が笑ったのが分かった。それはもう魅力

的に。

だから、魅せるように笑ってやった。

「霊夢、この方を死なない程度まで痛めつけてくれる?」「は?」
「え?」

おーい紫さん。僕は貴方を怒らせたかなー。おーい。何ソレ、どんな虐めだよ。泣いちゃうぜ俺。

「死にそうになった時に能力が発現する――楽しみだと思わない?」

そして――また妖艶に笑う紫さんでした。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆
★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

――突如背後に受けた凄まじい一撃で、この日何度目か分からないが天地が反転、肩から地面に落ちそのまま五、六回バウンドし、止まる。が、視界にハンドボール級の球が見えた瞬間、自分の意思で体を横に投げ出した。風を切るような音と威圧を出しながら、その球は地面に弾ける。

起き上がると同時に、空中に居る霊夢さんを囲うように周っている。足の筋肉は悲鳴を上げ、捻った足首はきずきと痛みだし、呼吸をする毎に砂が肺に紛れ込む。正に――地獄。一切合財抵抗の出来ない俺は、こうして逃げる事しか出来ない。

「ギブアップって言えば終わるのよー」

空中からの声。ギブアップなんて出来る訳がない。そう思っていると、目の前に弾。これは避けられない——腕をクロスし弾を受ける。慣れない衝撃に体は吹き飛び、両足は地面から浮く。輝く太陽を視界に入れた瞬間、背中から地面に落ち頭を強打してしまう——まずった。

何とか、何とか頭に着弾しないようにしてきたというのに——地面に強打してしまえば終わりじゃないか。

「あら——頭打ったみたいね。もう終わりでいいんじゃない？ 疲れたし」

そんな声が聞こえた。なめやがって——なめやがってッ！

くらくらする頭を持ち上げ、頭を振る。後一回でも頭を強打すれば——死ぬかもしれない。が、それがどうした。それが——何だというのだ。俺は元々死を望んでいた。それを生かされ、生きる事にした。だからここで死んだとしても——俺は別に後悔も反省もしなくていい。

さあて——足掻かせろ。

「なめてんじゃねえよ——糞巫女が」

言った——瞬間、目の前が真っ白になった。同時に正面から衝撃を受け、けれど今度は前みたいな生半可なものじゃなく——気が付いたら仰向けになっていた。何が起きたのか理解できない。立ち上がろうとして——何が起ころうか確認しようとして——体が動かない事に気が付いた。

そして数秒経ち、全身がもやもやとしているのに気がつく。全身が胸焼けしているような錯覚。次の瞬間——俺は血を吐いた。これまで十六年間生きてきて、俺は初めて血を吐いた。仰向けの状態で

血など吐けるのか——これは、きつつい。早く起き上がらないと——俺は血を飲み込んでしまう。それは危険だ。死ぬかもしれない。

死ぬかも——知れない？

ああ——結局俺はここで生きたいって事か。結局、俺の心はここを望んでいるって訳か。なら——いい。もう——いい。

この世界で楽しく生きる為——俺はここで倒れる訳にはいかない。人に眠る潜在能力という名の能力は——まだこの程度じゃ開花してくれない。

「限界を——決めるな。進化に——壁を造るな」

呟く。

「自分を——否定するな。夢から——逃げるな」

呟く。

「男なら——」

呟く。

「——諦めてんじゃねえッ！」

そして——ゆっくりとした動作で、俺は体を起こす。目を見開く。霊夢さんと、縁側で意地悪く笑った紫さんが見えた。次の体を立たせて、俺は自然の動作で右手を突き出す。

——変化させる。

「『変化させる程度の能力』——ね」

紫さんが呟いた。成る程。そうか。

霊夢さんの足を木の棒に——変化させる。

「……何も起きないわよ？」

朦朧とした意識でそんな言葉が聞こえた。おいおい勘弁してくれ——人には作用しないのか？

けれどまだ倒れない。空中でふわふわしていた霊夢さんが地面に降りてくる。もう弾を撃つ気はないらしい。

——霊夢さんの周りの空気を、強烈な睡眠毒に。

「……？　何も起きないわよ？」

……。

……それは、アンタが規格外だからですよ、霊夢さん。

口は開けなかった。声帯も動かなかった。薄れゆく意識のなか——霊夢さんがかくんとふらつのが見えただけで——満足だった。

「あ……眠い」

二話 白黒感情（前書き）

魔理沙さん登場回。わーパチパチ。

二話 白黒感情

驚く程すつきりと意識が覚めたなあなんて思いながら目を開けると、知らない人がこっちを見てた。……あれ、メイドさん？ その手に持った箒は……何だろ？ つか帽子が尖ってやがる。

何か——魔法使いみたいな、印象だ。いやしかしここには魔法使いも居るんだだけか？ んじゃあこの人魔法使いなのか？ 分からん。

「……そんなに見つめられると照れるんだぜ」

「こりゃ失礼」

とりあえず視線を外して、起き上がろうと試みてみた。けどノーパワー。霊夢さんにフルボッコされて起き上がる力も失ったようで……ああ、そうだ。何か変な能力あるんだった。

だから体を普通の状態に変えようとしてみたが——出来ない。霊夢さんに使用できなかったからもしかやと思っていたが、成る程つまり人体には使用出来ないのか。

「あの」

「ん？」

「名前お聞きしても宜しいですか？」

「ああいいぜ、自己紹介がまだたったな。霧雨魔理沙っていうんだ！ よろしくな！」

霧雨魔理沙……魔理沙さんか。黒と白が基調の……俗に言うメイド服を着こなして、これまた黒白のトンがり帽子、腰くらいまである長い金髪。オーケー覚えた。

「お前は何て言うんだ？ 私だけ自己紹介してお前はしないっていうのは何か居心地悪い」

「あー……そういえば紫さんと霊夢さんにも自己紹介してなかったな」

「……変な奴だぜ」

「まったくです」

そう言うのと魔理沙さんはくつと笑って、立ち上がる。ふわりと金髪がなびいた。紫さんとは違う意味で魅力的だ。これまた惚れそうだ。これで惚れたら三人に惚れた事になるから止めてほしい。どうしてここの人達はこうも魅力的なのか俺には理解できん。

「霊夢と紫連れてくるぜ」

「いつてらっさい」

……そういえば霊夢さんあの後どうなったんだろ。象くらいなら軽く眠らせる量の睡眠薬だったのに、まるで気にしていなかった。不死身なんだろうか。……意外にありえそうで怖かった。

程なくして、目の前に空間が開く。いや、隙間と言った方が正しいか。おびただし量の眼球がその空間には埋め尽くされている。そういう怖がらなかった外来人は俺が初だとか言ってた。怖いというより不気味なだけだな。

「起きたのね」

「一々隙間使わないで襖開けて入ってきてくださいよ」

そう言って襖を指差そうとしたが、力が一切入らなかった。非常にまずいような気がしてならない。これ二度と力が入りませんと言われたら舌嚙んで自殺しよう。出来ないと思うからやっぱり泣こう。

そんな事思ってたら静かに襖が開けられ、霊夢さんと魔理沙さんが入ってくる。

「ああやって入ってきてくださいよ」

「あら、そうすれば貴方を落せるかしら？」

「いやいやもう落されてますから安心してくださいよ。ちゃんと惚れましたから」

「そう言って惚れてる人は居ないのだけれどね」

「そうですかね」

とうにかまた紫さんの口調が最初と同じようになってる。まあこっちの方が合ってるといえは合ってるんだけど、せっかく崩したのにもったいない事をした。あ、でもこっちの方が良いって思ったのは俺か。ならいいや。

「で……良い雰囲気になってる所申し訳ないけど貴方の名前聞いてもいいわよね？」

呆れた表情で霊夢さんはそう言ってくる。ていうか何で霊夢さんの巫女服は露出が多いのだろうか。謎である。謎は謎のままが良いと聞くが俺としては謎は怖いんだけど。どうでもいいか。

ただ脇が見えるというのはまずい気がする。脇巫女と誰かに命名されてるんじゃないか。

「ちょっと、聞いてる？」

「ああはいはい、名前でしたね名前」

——名前を言おうとして、言葉に詰まった。
……。

「名前、思い出せないんですけど」

「くっ。くくくっ……お前やっぱ変だぜ」

といいながら腹を抱えて笑い出す魔理沙さんと、何となく予想していたみたいな表情の二人。でも呆れが混じってますよー、呆れは隠すものでしょう。

はてさて……しかし、名前。何だっけか。そういえば名前を最後に名乗ったのはいつだったっけ？ それすらも思い出す事が出来ない。——そもそも俺に名前など有っただろうか？ そういうものを一切与えられず、人として生きる事を止めさせられたから——俺は死を望んだんじゃないか？

「——すいません、ちょっと思い出したいので一人にさせてくれませんかね」

――吐きなれた嘘を、俺は吐いた。

……一体、どの位の間泣いたのだろうか。力を振り絞って布団にもぐり、声押し殺し、嗚咽を押し殺して泣いたのだから外に洩れては居ないだろう。今になって、どうして泣いたのかも分からなくなってくる。

「ああ。起きるか」

「ん、おはようだぜ」

「最初からだぜ」

時間位泣いたり葛藤したりしてたのか。ていうか最初から居たって……紫さんの仕業だろう絶対。

「一人にしてくれて——言ったんだけどなあ」

諦めたように動ける手を使っておどけてみせる。魔理沙さんにはかっと思ろく笑って——

「一人は寂しいんだぜ」

そう言ってみせた。魅せた。畜生良い笑顔だった。どうしてこうも——魅力的なんだよ。また涙が出そうになって、歯を食いしばって耐える。さすがにここで泣く訳にはいかないだろう。プライドは、あるんだ。

「——どうも、ありがとうございます」

「いやいいって、今度盗ませてもらうから」

「前言撤回してもいいですか？」

「それは認めないぜ！」

認められないみたいだった。

「さて、と。それじゃあそろそろ起きますかね」

「おっ。三日ぶりの起床だな！」

「……今なんていいました？」

「三日ぶり」

「……そんなに寝てましたか俺？」

「ぐっすり眠ってたぜ！」

「何か悪戯されてませんよね？」

「ん？ 紫が朝お前の部屋から出てくる所なら見たけど？」

「……いや、さすがに、ありえないだろ、それは。何もされてないよな……」

ちょっと不安だ。何かされてたら慰謝料払ってもらおう。

「まっ、妖しい事はされてないんじゃないか？」

「……怪しいの間違いだと思いますけどね、いや、どっちでもいいのかな」

「難しいぜ」

「難しいですね」

軽口を叩きながら立ち上がり、膝から崩れそうになったのに驚きながら耐える。こんな体験は栄養失調で倒れたとき以来だ。両親に土下座して野菜を大量に貰ったのを思いだす。生人参は中々に美味かった気がするな。

こんな風に思えるって事は、どうやらもうここに慣れたみたいだ

った。俗にいう異常慣れとか現実逃避とかが関係しているんだろうか。

「肩、貸すぜ？」

「いやいいです、危うく襲いそうになっちゃうので」

「襲ったら殺すぜ」

「責任は取りますとも」

そう言ったら顔を紅潮させはじめる魔理沙さんが居た。いや、責任ってそういう意味じゃないからね、死ぬっていう責任の方だからね？ とは敢えて言わない。言ったら殺されそうな気が間違いない。

「行きますよ？」

「え……あ、ああ」

マジで誤解は止めてほしい。襖を開けると橙色の影が出来ていた。背後の夕日が原因なんだろう、幻想郷という名の通り、幻想的だった。フローリングなのか知らないがとりあえずそれっぽい床の縁側を魔理沙さん先導で歩き、僕はついていく。途中魔理沙さんが振り返るのは足元のおぼつかない俺に対する気遣いか……情けない。

ある襖の前で魔理沙さんは止まる。開けて中に入ると夕食の準備をしていた霊夢さんが居た。得意なのだろうかと考えて、愚問なのだろう。

「魔理沙、丁度いいから手伝って。アンタは座ってて」

とてとてと走っていく魔理沙さんの後ろ姿を見ながら、胡坐をかいて座る。畳の香りが匂ってきた。何だか初めて嗅いだような気がするのは気のせいだと信じたい。

「……霊夢さん」

「何？ 今忙しいから後にしてくれない？」

「一時の間でいいので——ここに住ませてくれませんか？ 家事も出来ますし、言われたら何だってやるつもりです」

一切の感情を込めずに言ってみた。

「はぁ……あの隙間妖怪に住ませてあげてって頼まれたわよ。それを知った上で言ってるでしょ」

「予想した上でですけどね」

「まっ、変な事さえしなければその能力も有るし一生住ませてあげてもいいんだけど？」

「ありがたいんですけど、それじゃつまらないので」

「……言うと思ってたわ」

「予想してましたね」

そうして博霊神社で生活する事が決まったのである。

二話 白黒感情（後書き）

なに後悔はしていないさ。更新は早めにするつもり。

三話 決意と嘘

——ほら見ろ、こんな近くに星があるぜ！ 滅茶苦茶輝いてるぜ！
あっはっはっ。

「——何でこうなった」

「誘拐したんだぜ！」

「人はそれを拉致という」

魔理沙さんに誘拐——もとい拉致されました。そうです拉致され
たんです。もうこれしか思う事がありません。箒に跨ってひいひい
言いながら小柄な少女にしがみ付いている今の状態を、果たして前
までの自分は許せるのだろうか……。

見ろ！ 月が欠けてる！ これは異常事態だ！ 三日月なだけで
すけど。

「で……俺はこれからどこに行くんでしょうか？」

「魔法の森だぜ」

「どうして行くんですか？」

「ざつよ……手伝いしてもらいたいんだぜっ！」

「今雑用って言おうとしたな！ 霊夢さんに頼んで撃ち落してやる
！」

「な、それだけは勘弁してくれ！ 真赤になって落ちちゃうぜ！」

「赤い……紅い彗星ですね、分かります」

「何だそれ」

「いえ何でも。てか確か紫さんの話だと魔法の森って毒ありまくりじゃなかったですか？」

「能力使えばいいと思うぜ。あるんだろ、能力？」

「はいです」

言いながら、自分の周りの空気を毒を弾く様に『変化』させる。
見た目的には何も変わっていないが、魔法の森に行けば分かるだろう。いや、毒って見えるのか……？ ていうかキノコの胞子とかじゃなかったっけか。

……松茸一回でも良いから食いたかったな。いや、でも紫さんに頼めば大丈夫かな。その代わり何を要求されるのか分かったもんじやないけど。

「さてえと、それじゃ魔法の森に到着だぜ」

「迷宮みたいですね」

「迷いの竹林程じゃないと思うぜ？」

「ゲームのダンジョンみたいですね」

「……？」

「小首を傾げた魔理沙さんも中々良いですね、カメラを持っていなかった事が非常に悔やまれて仕方が無い。……おーけー、分かった、謝るからその手にもったカードを下げるんだ。非常にヤバイ事になりそうで困る」

「この寛大な心に免じて許してやるぜ」

「そして雑用が増えるんですね、分かります」

「な、何故バレた!」 「ちょっとは遠慮しろや」

「……その位砕けた口調出来るなら、さん付けしない方がいいと思うぜ?」

「俺がさん付けを止めた時は俺のキャラが崩壊する時です。俺のキャラが崩壊する時は俺が死ぬ時です。ていうか俺がキレちゃったみたいなの時だけです。てか何その引いた目は、おいこら」

「元々変人だと思っていたがこれ程とは……」

「潰すぞ魔法使い」

軽口を叩きながら、魔法の森の入り口らしい所に降りる。箒から弾けるように飛びのき、すっと息を吸う。大丈夫だ、体は動く。毒は先程の変化でちゃんと来なくなっているようだ。

周りを見渡すが辺りは闇ばかり。夜なのだから当然か。だが一応という事もあるので、手のひらの周りにある空気を明かりへと変化させる。当然出来た。余りにもチートすぎる気がする。

「おお、灯りだ」

「一応です」

しかし霊夢さんに生活すると告げたその日に拉致される事になるとは思っていなかった。目が覚めると空なのだから驚き。そういえば余りにも寒かったから服を防寒に変えたんだっけ。今の季節は秋だろうか……外の世界と時間軸がずれて居ないのか。

「あ、あと妖怪出ることあるから気をつけろよー」

「……魔理沙さんに任せたいんですけど」

「何言ってるんだ私は乙女だぜ」

「どこの世界にこんな人間らしからぬ乙女が居るのでしょう。霊夢さんに聞きましたよ、どれだけ貴女が恐ろしいか。ああ僕はそんな魔女に連れ去られた哀れな子羊。よよよ……」

「きもっ」「すみません調子乗りすぎました」

……しかし、妖怪か。一体どんな妖怪だろうか。興味が湧いてくる。

いや、どんな妖怪という事もないのか。事実、紫さんのような妖怪も居る。偏見は恐ろしく、油断を誘う。

「それじゃあ……行きましようか」

「——おうっ、魔理沙さんに任せとけ！」

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

——俺は、正直なめていたのだと思う。

生物が——死ぬという事に。

なめていたのだと思う。

魔理沙さんが自らに襲い掛かる妖怪を殺すのは当たり前の事だ。

その当たり前の事を目にして——俺は後悔した。生物なのだから血と同じような液体も出るだろう。そして同時に手足と思われる部分は玩具のようにひしゃげ、顔面は豆腐のように粉碎され、半身は面白おかしく吹き飛ぶ。

当たり前——そう、当たり前なのだ。やらなければ死ぬという時点で、相手を殺すのはもはや必然。当たり前。

結局俺は甘かった。楽観的だった。楽観的すぎた。軽く捉えていた。

生き物は、死ぬ。

終わらないものは無い。

いつ終わるかは分からない。

でもいつかは終わるのだ。

「おい、大丈夫か？」

軽やかな笑みを浮かべて、魔理沙さんは近づいてきた。

だから、ぎこちない笑みを浮かべて、俺は口を開く。

「はい、大丈夫です」

口から出たのは――吐きなれた嘘だった。

でもバレなければ嘘は真にすり替わる。この嘘も結局、真に変わる。

「嘘だろ」

――魔理沙さんは断言する。金色の混じったその瞳を少し細めて、確信をもった音色で断言する。

嘘は嘘で終わった。

思わず、唾を飲み込んだ。辺りは暗い。風が揺らす木の葉の音しか聞こえない。ひらりと、風にまって葉は落ちた。

手のひらから漏れた僅かな光は、魔理沙さんの悲しそうな表情を一瞬だけ映した。

けれど、俺の喉は震えない。大気を揺らす「嘘じゃないです」という言の葉は、落ちてはこない。

「バレちゃいましたか」

代わりに、清しい程の音色で俺の言葉は落ちた。暗闇に溶けるように消える音。その余韻全てを聞き入るようにながら、魔理沙さんは目を閉じた。

そして、辺りが静まり返った時、魔理沙さんは目を開ける。

「私を誰だと思ってるんだ――普通の魔法使い、霧雨魔理沙さんだぜ」

晴れやかな笑みと共に魔理沙さんは告げる。

——嘘。

「この俺を前にして嘘を表すなんて、愚か過ぎて言葉も出ません」

「何、言ってるんだよ。私が嘘なんて吐くはずないぜ」

——嘘。

「それじゃあその悲しそうな瞳をどうかしてください」

「……おかしいぜ、お前」

——嘘。

「大丈夫ですよ、別に俺は魔理沙さんを変な目で見るつもりはありません」

「だから、だから何言って——」

「俺が甘いだけだったつつてんだよッ！ お前が妖怪を殺すのは

俺の為だったんだろうがッ！ それを恐怖しちまった俺が悪いって
——そう言ってるんだよッ！ お前まだ俺と歳ほとんど変わらねえだ
ろうがッ！ 見かけ相応なんだろうがッ！ もっと——頼ってくれ
よ！」

——俺は。

「悔しいんだよおおッ！」

この少女に何もかもを押し付けて——。
妖怪を殺すという事も押し付けて——。
拳句の果てには生物を殺す少女に恐怖して——。

押し付けられた少女は何も言わず——。
俺を守る為に少女は妖怪を殺す業を背負い——。
俺に恐怖されても俺を気遣い——。

俺は——

「無理は、するもんじゃないぜ」

「貴女に言えた台詞じゃないでしょ」

「そいつは酷いぜ」

「なら泣くのを止めてみろよ」

「……意地悪だぜ」

「ほらお兄ちゃんが胸貸してやるよ」

「お前十六歳だろ？ 私は十七だぜ」

「お前は女で俺は男だろう」

「よく言うぜ」

「ほら吹きなもんで」

——幸せに生活できるよう、強くならないといけない。

三話 決意と嘘（後書き）

作者の東方知識はここに載っている小説様を拝見させて頂いた程度です。

魔理沙さんの口調は書き辛い。ただ性格は女の子なんだからあんなだろうと思う。強がりなんだぜ魔理沙ちゃん！　ってか。

四話 真の決意は嘔吐きに

「……正直言うと、汚い」

「あははっ……は、は。まあ、アレだぜ！ 乙女の秘密っていうもんだぜ！」

「……さすがに今日は働きませんよ？ 後雑用だとしても報酬は頂きますからね？」

言った瞬間舌打ちが聞こえたような気がする。気のせいだと信じたい。そして報酬を貰うくらい普通の事だろうかと叫んでみたい。

——しかし見事に散らかっている。俺じゃ一生解読出来ないような文字の書かれた本があちこちに散らばっていて……いや、文字そのものを変化させれば、あるいは読むことが出来るか。ただそんな事の為に能力を使うのは、卑怯だと思う。

思うだけだけど。

「まあ、とりあえず、アレだぜ！ 今日が遅いからお風呂入って寝ることにしようぜ」

「あー……」

「無いと思うけど一応言っておくぜ。覗いたら殺す」

「いやいや、俺が覗くような人間に見えますか？」

「ある意味じゃ見える」

「酷えな」

——先程まで涙を垂らしてた姿は微塵もなく、そこには元氣溢れるいつも通りの魔理沙さんが居た。やはりこの人にはこういう表情が一番似合っているだろう。というかしつくりくる。

だから俺はいつも通りの胡散臭い笑みを浮かべて、足場に注意しながら腰を下ろした。魔理沙さんはそれを見てから廊下を歩いていき、風呂場に向かったのだろうか。残念ながらまだこの家自体を把握していない俺には分からない。

ふう、と。

溜息を一つ吐いた。瞬間、怒涛の勢いで疲れが溢れ出てくる。今日は色々な事が有りすぎたのだろう。さすがの俺でも許容範囲を越えるような出来事が、たくさんあった。そもそもこの世界に来たという事実が、未だ飲み込めていない気がする。

いつもならば今頃——そこまで考えて、それを振り払うように頭を振った。それはもう過去の出来事なのだ、それはもう過去の光景なのだ、それはもう過去の思い出なのだ——今、思い出して後悔するのは愚の骨頂だろう。

そんなヘマは、二度と犯したくない。

そんな愚者には、二度となりたくない。

過去を思い出し死ぬ位ならば——今を生きて後悔していたい。

「胡散臭いよなあ……」

何もかもが、胡散臭い。

この世界も、この世界の住人も、この世界の住人である紫さんや霊夢さんや魔理沙さんや妖怪達も、そして魔理沙さんが見せたあの涙も、あの泣き顔も——俺にとっては、胡散臭い。

それは、きつと俺の心がまだここに定着していないからなのか――
―定着したと錯覚しているだけなのかもしれない。

「そもそも、こんな事考えてる時点で定着してる訳ねえよなあ」

そんな、独白。

誰にも聞こえない、独白。

「あらあら――お困りのようですわね」

瞬間――背筋が凍った。紛れも無く、俺の体は硬直した。動かない。冷や汗がだらだらと体全体を蒸し始めた。喉が急激に渴き、水分を欲する。いつの間にか握っていた拳から、手汗が滲んだ。

ごくりと、生唾を飲み込む。背後からの声に、未だ俺は喋る事が出来ない。声の主は分かっている。分かっているから振り向いて、いつも通り胡散臭く挨拶すればいい――それが、出来ない。

何故か？

愚問だ。

――紫さんが俺に対して敵意を向けているからだ。

何故か？

愚問だ。

――俺がうじうじしているからに、決まっているだろう。

「先程までの――素敵な御仁はどこに行ってしまったのでしょ
うね？」

魔理沙さんにあんな台詞を吐いて。

例え妄言だとしても。

例え虚言だとしても。

例え戯言だとしても。

例え——嘘だとしても。

俺は決心したはずだ。ついさっき決心したはずなんだ。強くなる
と思ったはずだ。なのに——何故？ 何故今更俺はこんな事を考
える？

過去を思い出すのは簡単だ。

未来を思い浮かべるのは簡単だ。

でも現在を進行させる事は難しい。苦しかった過去？ 理想の未
来？ 馬鹿か。今は今だろうに。ああ——もう、嘔吐きともあろう
者が、本当に情けない。

「ここに居るのは——迷い困惑している蛆虫一人なのでしょ
うかねえ」

背後から囁くように聴こえる妖艶なまでの声。蛆虫？ 正解だ。
すうっと、息を吸った。魔理沙さんが来る前に俺は言わなくちゃ
いけない事がある。

「いえいえ——何千年も生きた妖怪が一匹、居るようです」

——突然、凄まじい威圧感がぱったりと消えた。ふっと、体が楽
になる。強張っていた体が弛緩する。

すると唐突に背後に何かが当たった。そして白くしなやかな手が
俺の体を包み込むようにした。

あつ、やべえ怒らせたかもしれねえ。

「幻想郷は全てを受け入れる場所ですわ——だからこそ、貴方の本能がここを望んだのです」

甘い吐息と共に耳の中に進入してくる囁く言葉。電流のような言いようも無い快感が全身を貫く。落ち着け、冷静になれ、落ち着くんだ。本能、そうか本能か、本能が……ヤバイ駄目だ年頃の少年には刺激が強すぎる。

「……離してくれませんかね？ 暑すぎて窮屈です」

「あら？ 恥ずかしいのかしら？」

「まさか。俺は女慣れしているから恥ずかしくないです」

そんな嘘。

「……ふうー」

耳に息を吐かれた。本能的に体がびくびくってなりました。駄目。伊達に千年以上生きていないのか。男の操り方を完璧マスターしてやがるっ！

「あらあら？ 女慣れしているんじゃないのかしら？」

「耳に息吐かれたら誰だってああなりますとも」

「下半身もかしら？」

「すみませんでした！ これ以上言わないでください俺の精神がズ

タボロになっちゃいます」

「私は最初貴方にされたのだけれど？」

「アレは紫さんの良心に漬けこんで嘘八百吐いてました」

「最低ね」

まあ確かに嘘吐くのは最低……？　どうだろう。そこら辺分らない。とりあえず拘束を解いて欲しい。カムバック魔理沙さん。魔理沙さんが居ないと貞操が危ない。どうして女の風呂はこうも長いんだと問い詰めたくなってきた。もうかれこれ十分は経過しているはずである。

というか眠くなってきた。紫さんに抱きつかれてるからか、何だか暖かい。心地のよい暖かさ。

……駄目だ、これ寝よう。

「おやすみなさい」

「随分唐突ですわね」

何て言われたけど構わない。座ったまま寝るのは外の世界で慣れているからそれほど苦でもないし。

まあ。

外の世界なんてどうでもいいんだけどね。

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

「……オーケー、落ち着け俺」

目の前に魔理沙さんの寝顔。

意識を覚醒してみるとここはベット。

寝たのは床だ。

……俺が寝惚けてここに入ったのか、はたまた魔理沙さんが連れてきたのか。

後者であるとありがたいが、前者だったら間違いなく殺される。

逃げようにも魔理沙さんが俺の制服を掴んでいるんだから無理である。

ここでオウマイコーラとか言ったら死ぬだろうか。どうしても叫びたい気分。

「とりあえず死ぬのは意識が無い時にしてほしい」

「……ん、んう………」

だらだらだらだら冷や汗が……。

「うううん………え？」

「……え？　なんで魔理沙さんが居るんですか？　あれえおかしい。

俺は床で寝たはずなのに」

「……おはようだぜ」

「……おはようです」

「……」「……」

とりあえず無言。無言無言。

こういう空気になれているのは良い事なのか悪い事なのか。

「ああ……えっと、状況把握が出来てないんだが……えと、その、つまりそういう事でいいのか？」

頬をちよつと朱に染めて恥ずかしそうに目を逸らし、魔理沙さんは言う。

「……いや違うと思う。」

「いや、それは違うかと……」

「恥ずかしがらなくていいんだぜ？」

「いや、本当に違うかと……」

「私が年上だからなあ……」

おいコイツ全然話聴いてねえぞ。つか変化させる能力があるんだからそれで抜け出せばよかった！ 何故今頃になって出てくるんだそんな妙案！

「あのー、俺が寝惚けてここに入っちゃっただけだと思っくんですよ……」

「ん？ 何だそうなのか？」

「はいはいはい」 余裕の三回頷き。

「ちっ」

……魔理沙さんは良い子です。

……俺が年下だから気を使ってくれる良い子です。

……だからあの舌打ちはどこぞの隙間妖怪さんのものです。

……そう信じたい。

五話 名無しの怒り（前書き）

人形遣い！。

五話 名無しの怒り

ここが外の世界だったら間違いなくゴキブリが這い回っていそうな埃だらけの部屋。変化させる能力はあまり使いたくないので、箒を使って掃除しているが……終わる気配が見えない。魔理沙さんは俺に仕事を頼むと茸を採りに行くとか言ってどこかに消えた。まだ朝頃だから家に妖怪が襲ってくるとかは無いだろう。そもそもどんな原理か知らないが、そんなに家の外見は悪くなかった所から見ると今まで家は妖怪に襲われていないようだった。それが撃退しているのか。

ただ撃退しているのだとしたら、ここに俺を残す意味は無い。俺は戦闘能力皆無なのだから、家を壊されなくなかったら残さないだろう。つまり何らかの手段で家は守られている……。果たしてそれは何なのか、気になって仕方が無い。

「……掃除しなきゃな」

どうでもいい推理に回っていた脳みそを戻すように頭を左右に振って、息を吐く。太陽はもうじき正午を伝えるように、真上に昇るだろう。それまでにこの部屋は掃除しておきたい。というかまず本の膨大な量の本は一体どこから持ってきているのだろうか。

考えていても仕方が無いので片っ端から本を取り、一箇所に纏めていく。喘息持ちだったら発狂していそうな位の埃が漫画みたいに溢れ出てきた。ああ、どうしてこんな所で生きれるのか……なんて失礼な事を考えてしまった。

落ちていく埃を箒によって部屋の中央に纏め、ちりとりのような物で拾っていく。ゴミは渡された袋に詰め込んでいき、それを幾度と無く繰り返し替えていく。

「……疲れる」

本当に疲れる。溜息を一つ漏らし、ゴミ袋を縛った。これで何袋目だろう。少なくとも片手の指じゃ数えきれない程のゴミ袋は溜まったはずだ。処理の方法は言ってなかったはずだから、俺に任せるといった所だろうか。さてどうしようか。

考えながら埃などを拾ったり、転がっているガラクタを拾ったりしていると、いつの間にか作業は終了していた。残されたのは昼になって輝きを増した太陽の光と、その光によって煌くゴミ袋の山のみ。……本当にこれどうするんだろう。魔理沙さんは魔法使いだし、このゴミ袋の山を消す位造作ないのだろうが……変化させる能力では消す事は出来ない。

「捨てにいくかな」

と思い立って……ここはゴミ袋を捨てる場所など無い事に思い至った。紫さんとか居ないかな……居たら隙間でどっかに送って欲しい。送られた人は困るだろうが。

どちらにせよ処理は俺がするしかないという事か。とりあえずこの場面じゃ仕方ないし、能力を使う事にしよう。ゴミ袋の山を『空気』に変化。

瞬間、凄まじい量の埃が空中に舞った。

……フリーズしていた脳みそを解凍する。ゴミ『袋』を空気に変えちゃ駄目だろ。俺は馬鹿なのか。馬鹿なんだろう。ああ……もう嫌になってくる。もう一度能力を使おうとして――膝がかくりと落ちた。いや、折れたというべきか。呆気なく、俺の足が悲鳴を浴びたのだ。

掃除のせい？ そんな訳ない。

能力の副作用。

凄まじく効果のある薬ほど、副作用があるのと同じ。俺の能力はそんなに使えるものじゃないのだ。精々一日二回が限度といった所。それ以上使えば、体がもたない。

だから霊夢さんと闘った時も、氣力が持たなかったのだと思う。しかし、今能力を使わなかったら魔理沙さんに何言われるか分からない。

ので、舞っている埃共を全て紙に変えた。空気などに変えるのは負担が大きすぎるので、これが最良だろう。もう紙切れをぼうっと眺めながら、ぱたりとうつ伏せに倒れた。心臓がマラソンを走りきった直後のようにばくばくと鳴っているのに対し、体は馬鹿みたいに冷え始める。このまま倒れたらますます体温が下がるばかりだ。

「日向に……」

脱力した体を何とか動かして、蛆虫のように這いながら日向に向かう。昼を目前に構えた太陽の直射日光は、しかし秋という事も関係してかとても気持ちがいい。朝からの労働と能力の限度である二回使用、疲労のピークに達していた事もあり、瞼は驚く程自然に閉ざされた。

ひんやりとした風が体を撫上げるとき、既に俺の意識は半分程沈んでいた。後、一息で……寝れるだろう。

「おーいつ、掃除終わったかー！」

「ちょっと魔理沙、少しは声静めなさいよ」

おいおい……勘弁してはくれないのか。朦朧とする意識でそう呟

いて、無理やし意識を覚醒させる。鉛のように重い瞼は幾度と無く落ちるが、気力で目を見開く。ふらつく足で立ち上がり、玄関へ歩いていくと、魔理沙さんと横に少女が一人。

金髪がショートカットになっており、長さは肩位までか。赤いヘアバンドをしていて、それが似合っている。肩の辺りには人形が浮いていた。……人形？ 妖精みたいだ。ただ小さすぎるから、やはり人形なんだろう。

「掃除は一応終わりましたよ。……はじめまして、こんにちは」

「もう終わったのか！ 流石だぜ！ これで手伝わなくてすんだ」

「魔理沙、アンタ自重しなさいよ。……はじめまして」

こんにちは、は無しか。どうやらそこまで友好的な関係は築きたくないのかな？ いや、それよりも名前を名乗っていないからか。名前——名前、ねえ。

「シャンハイッ！」

……人形が喋りやがった。

「シャンハイ？」

こちらの表情を覗き込むように近づいてくる人形。意思があるのか、それともこの人の術なのだろうか？ ちらりと横目で少女を見ると、額に手を当ててやれやれと言った風に頭を振っていた。

術……じゃあ、無いよなあ。

「……シャンハイ」

「シャンハイ！」

「上海？」

「シャンハイ？」

「シャンハイ」

「シャンハイッ！」

「シャンハイ！」

「シャンハイ！」

肩に乗ってくるシャンハイという人形。ヤバイ、何コレ可愛い。癒される。余りにも和むので疲れを癒そうとして、その後二、三分シャンハイシャンハイ言い合っていた。

はっ！ と我に返って魔理沙と少女の方を見ると、首を斜めに傾けてジト目をしていた。何かに目覚めそうだからそんな表情しないで欲しい。というか呆れられた。

「ええと……この人形、凄いですね」

「まあ、ね。一応言っておくけど私は操っていないわよ？」

「……意思を持った人形、ですか」

「ま、そんな所ね」

……ここでそれを褒め称えても、別に嬉しく感じはしないだろう。言われ慣れている事を言われても、大して嬉しくないのだ。嬉しいと感じているのは上辺の感情。深層では何か違う事を求めているはずだ。

「あつ、そうだ！ 忘れてたぜ、報酬」

「あ、そういえばそうでしたね」

「持ってくるからちよつと待ってろおー！」

言いながらとたとたと歩いていく魔理沙さんを見てから、それから少女の方を見る。

「……俺は——名前が無いんです」

そして視線を宙に彷徨わせた。言うのに躊躇っていた昨日までの俺は、居ない。もう過去は見ないと決心したのだ。俺は、だから今出来る事をする。

俺に出来るのは、それだけしかない。

宙を彷徨っていた視線を、目の前の少女の瞳に向ける。

「名前……が？」

「はい——だから先程、名前を言わなかった事は詫びません」

瞬間——少女の視線に影が差した。全てを射るような視線に変化したそれが——俺の瞳を捉える。

詫びないという言葉に対して——威嚇しているのだろう。肩の辺りに彷徨っていたシャンハイ人形が、ふらりと身を返して少女に向

かう。

そして同じように、こちらを威嚇しはじめた。

「詫びないって——どういう事かしらね」

「どういう事も——無いですよ」

気圧されたら、負ける。踏みとどまれ。千年生きた紫さんよりは、マシだ。それ程の脅威は感じない——とは言っても、この少女が人間じゃない事は理解した。直感というよりは、雰囲気が違うのだ。人間味を——感じない。俺のように何の力も持たない人間に、殺意を向けているのが何よりの証拠である。魔理沙さんと仲良くやっているのは——魔理沙さんが強いから以外に理由は無いだろう。

「——ただ、事実として。俺は名前が無いんです」

「もう一度言うわ——謝りなさい」

ごうっと、人間が纏うオーラとは違う何かが、噴出された。完全なる怒り、憤怒の念。撒き散らされる殺気と、殺意。自然と喉が渇く。湿り気を無くした喉が声を出さない。

けれど——それでも俺は謝る事は出来ない。気圧されたら終わるだ。怖がったら負けだ。

恐れる位なら、謝れ。

上辺だけの謝罪をしろ。

上辺だけの許しを得ろ。

——そんなのは、嫌だ。

上辺だけの謝罪などしない。

上辺だけの許しなど要らない。

「何故——謝らなければならない？」

だから、怒れ。他人の感情など目にも入れないこの少女に怒れ。自分と同じような強さしか求めないような少女に怒れ。弱者など眼中に入れない少女に怒れ。他人の事情など気にもとめない少女にいかれ。己の感情しか計算に入れない少女に怒れ。己の非礼を認めない少女に怒れ。事実を理解しない少女に怒れ。

俺は——俺だ。

「俺には名前が無い——名前が無い事を、お前に謝らなければならないのか？　俺はっ、自らの不幸を他人に謝罪しなければならないのか？」

脱力する体に鞭を入れろ。脱力する心に鞭を入れろ。

「お前は俺に——謝れ」

同時に体が吹き飛び、気が付いた時には床に体を打ち付けていた。ちかちか点滅する視界には、無表情に手をこちらに向けた少女の姿があった。こんなもの——霊夢さんの一撃に比べれば屁でもない。

——立ち上がり、少女に指を指した。

「——すぐに力に訴えかけるのかよ、弱者」

精一杯の虚勢。これ以上の能力発動は危険だし、もう能力を二回も使用しているのだから粘る気力も薄れている。——だけど、それがどうした。

「——って！　おいお前ら何してんだよ！」

背後からの声。魔理沙さんだろう。少女の殺意と殺気が一気に無くなる。

——腑抜けが。

「来いよ——本気で。俺はお前みたいな八方美人が、一番嫌いなんだ」

だから、俺は自分が一番嫌いなのだ。

「私相手に喧嘩売る人間なんて初めてよ……いいわ、殺し合いましょ（やりあいましょ）」

「おいっ、お前ら何を——？」

「じゃあ——外に行きましょるか」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆
★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

今、俺はどの位血を吐き出しただろうか。仰向けに倒れて太陽の光を受けながら、そんな事を考える。あの少女は今倒れている俺を見て、きっと呆れている事だろう。戦闘開始後一分も経たずして、こんな重傷を負ってしまったのだから当たり前だ。

能力を使えばケリが付くのだろうが、死ぬかもしれないリスクは背負えない。

「……あんな威勢がよくてそれって、呆れるわ」

心底どうでもよさそうな音色の声。立ち上がろうとして、力が出ない事に気が付く。疲労による疲労は、魔理沙さんの家にあった埃のように溜まっていたのだろう。ああ、もうどうしようもない。やはり戦闘経験も無しで挑むのが間違いだったのだろうか？

今の俺を見たら、紫さんは呆れるだろう。ああ、どうしたもんか。本当に——どうしようもない。

名前が無いのと同じくらい——どうしようもない。

「で？ 立ち上がらない所を見ると決着かしら？ ——そのまま立たなかったら止めは刺さないから安心しなさい。まあ、元より痛めつけるだけだったから」

声が、段々と遠ざかっていく。それは俺の意識の薄れではなく、文字通り——少女が歩いていったのだろう。——このままで良い訳無い。

どうしようもなく——往生際が悪い嘘吐きが俺なのだ。

「待て——よ」

出てきた言葉は——しかし小さかった。既に声を出す事すらままならないのか。今更ながら自分に嫌気が差す。先程までの威勢はどうしたんだ——本当に、本当に、情けない。

けど能力さえあれば——俺は勝てた。コンディションが違かったのだ。これは仕方無い。そう——仕方無いんだ。

この負けは、仕方無い。明日になれば、勝てるはずだ。能力を使って、相手の攻撃そのものを変化させてしまえば——勝てるはずだ。明日勝ったら何て言おうか。負けを認めさせて謝らせるか。ああ——それが良い。それが、一番良い。今は休み時だ。仕方無い敗戦の

疲れを癒して、明日勝てば良い。そう、勝てば良い。

――。

――――。

――それで、良いのか？

――万全な状態で能力を使って勝つのは、当たり前じゃないか。

――あんなチートみたいな能力で勝って、俺は良いのか？

――フェアじゃない勝負で勝って、果たして少女は俺に謝るか？

――違うだろ。

――そうじゃないだろ。

――仕方無くなってるんだ。

――仕方無いなんてのは、逃げだ。

――リスクを背負わなくてどうする。

――今勝たなくて、どうする。

「待って……待って……ってんだろがああッ！」

獣の咆哮。薄れかかっていた意識が電流を流されたように覚醒する。返事は無かった。立ち上がると、少女が足を止めてこちらを見ていた。その目には、驚愕が浮かんでいた。そして、少女はゆっくりとこちらに向かってくる。

気圧するような威圧を浮かべながら、ゆっくりと近づいてくる。

アレは、一度痛い目を見せてやった獲物にやる一番効果的な動きだった。だが——どうした。それが——どうした。

俺は——俺であって——獲物なんかじゃない。

「来いよ——女」

「私は、女じゃなくてアリス・マーガトロイドよ」

「女に——変わりは無いだろう？」

減らず口を叩いた瞬間、アリスさんの周りに閃光が煌き、幾つかの弾が浮かんだ。来ると構えると同時、弾は凄まじい勢いで向かってくる。一発一発が、人間に耐え切れるような痛みじゃない。けれど耐えなければならぬ。

左右上下に襲い掛かる弾をかわしながら、アリスさんに近づく。近づく弾の密度や威力があがる。けれど近づく。一発——喰らわせないと気に入らない。邪念——体勢を崩した所に、鳩尾に入る弾。両足が浮いた。そのまま吹き飛ばされる。胸が嫌な感じに凹んだ気がした。骨が折れたのだろうか。近づいた分だけ、戻された。地面をバウンドし、滑るように転がる。受身の取り方など覚えていない。

けれど——立つ。

「うううおおおおおおおッ！」

叫び、右手を突き出した。
覚悟を決めろ。

死ぬかもしれない覚悟を――

死ぬ覚悟を決めろ。

『空気』を――『電気』に。

相手を気絶させる程度の『電撃』を生み出す。

何かに感づいたアリスさんが凄まじい量の弾を撃ってくる。それは弾幕という言葉が似合うだろう。

けれど――当たっても――倒れない。

範囲は――アリスさんの周囲の空気。

「『空気』を――『電気』に――変換ッ！」

一瞬の間――それで、俺とアリスさんの体は崩れていた。

五話 名無しの怒り（後書き）

作者中三。高校受験。でも更新はする。

オーケー？

べ、別に応援して欲しいとか思っていないんだからねっ。

六話 怪我の巧妙真につきまして（前書き）

久しぶりに和やかターン。久しぶりというより初めて？

六話 怪我の巧妙真につきまして

——意識が、覚醒する。粘着質な闇がざわざわと揺れ動き、光に変わっていった。重い身体が嘘みたいになくなり、これまた眼球に貼り付いていたような瞼が自然と取れた。

目を開けると、ぼんやりと顔が見えた。顔の輪郭。白い肌に大きな青い瞳、肩にかかる位の金髪が今はこちらに向かっている。顔を覗かれているのか。白くぼやけている視界が風に流されるように消えていく——視界が晴れた。

目の前にアリスさんが居た。

「……おはようございます」

「起きた、のね」

挨拶は返されなかった。返ってきたのは震える声。青い瞳には涙が浮かんでいる。ああ、俺のせいだ。体に力を込め、起き上がろうとしたが動かない。やはり能力の限界を超えた事が原因だろうか。ご都合主義のように覚醒とかはしなかったようだ。

事实は小説より奇なりとは言いが、んな事はないのだと再確認させられる。覚醒も無ければ進化も無い、あるのは定められた限界でどれだけの事を出来るか。

「……ごめんなさい。魔理沙から、聞いたの。貴方は本当に名前が無い事を……それなのに、本当に、本当にごめんなさい」

何だ……信じられてなかったのか。いや、当たり前といえば当たり前だ。いくらこの世界でも、名前が無い存在なんてのは居ないだろう。ここが幻想郷と呼ばれる聖地であるならば——それは尚更

な事なのかもしれない。

というか、涙を流さないで欲しい。泣かれるのは嫌いだ。

「泣かないでくださいな。泣くのは、卑怯ですよ」

ひび割れた声が出た。起きたばかりだという事はまるで関係無く、ただ俺の体が限界なだけなのだろう。何だかこのままだと本当に死にそうな気がする。そもそも物質を空気に変換するだとか、空気を電気に変換するだという事が限界を決めている気がする。

米粒の大きさを二倍に変える——とかならば、十回以上は出来そうな気がする。というか、出来るだろう。そうじゃないと割に合わない。強力だからこそ、二回が限界。

「……そうね、ごめんなさい。魔理沙呼んでくるわね」

「どうも」

そう言ってアリスさんが部屋から出て行く。ふと、思う。

——霊夢さんに殺されるんじゃない？ と。

やはりさすがに、まずいと思う。非常に。

だって泊まると言った日から行方不明で……ああ、ヤバイ。これは、絶対に何かしらの罰は喰らうはずだ。どうやって言い訳しよう……魔理沙さんに誘拐されましたとも言えば大丈夫な気がするが、ならこの怪我はどうするのだ。

……そこは妖怪にでも罪を被ってもらおうか。俺の命よりは妖怪の命、これは鉄則な法則。だって自分が何よりだもの。とか。

——思ってたら、凄まじい怒気がこちらに向かってきました。

「——ああ、死んだ」

呟いた瞬間、けたたましい音を鳴り響かせて扉が開いた。自らの
箒を握り締めている魔理沙さんと、それを必死に抑えようとしてい
るアリスさんが見えた。頑張れアリスさん、貴女が振り払われたら
俺は死ぬ。

思った矢先、魔理沙さんの手が煌いた。

「……タイムタイムタイム！ ちょっとストップして！ 謝るから
！ ねえ謝るからその光を鎮めて！ 分かったごめん！ ごめんご
めんごめん！」

「……遺言はそれで終わりか？」

「だから待ってて！ 待って待って！ つかアリスさん諦めたよう
に手を離すな！ うわタイム！ 魔理沙さんタイム！ ストオオオ
オオオツツプ！」

「……逝く準備は出来たか？」

「まだまだまだ！ まだ出来てないです！ とうかそもそも魔理
沙さんに怒られる理由が……いや本当ごめんなさい！ 分かりまし
た分かりました理由分かりましたってば！」

「……お前、どんだけ私が心配したか分かってるか？ お前は生身
の人間なんだぜ？ 魔法使いでも妖怪でも神でもない——人間なん
だぜ？ 簡単に死ぬって事、理解してるか？」

——金色の混じる瞳から、きらりと何かが光った。

「だから、死ねよ？」

「おいちょっと待てその流れはおかしい。明らかにそれは間違いである事を俺は主張しよう。貴様は間違ってる！」

「死ね」

「分かったいや分かんない！ てかソコ！ ソコのアリスさんとシヤンハイ！ 笑ってないで助ける！ つかふらふらこっちに近寄るな魔理沙さん！ 怖いから怖いから！ ねえ怖いから！」

事切れた人形のようにフラフラ近寄ってくる魔理沙さん。ちょっとまって怖いんですけど。ていうか叫びすぎて喉が切れたんですけど。

「名無し如きが私に口答えするなあっ！」

「ばっ！ 乗るなああああッ！」

ダイビングしてきた魔理沙さんによって全身が悲鳴を上げました。もう駄目だ。この痛みは駄目だ。死んだ方がマシな痛みだ。

「さあお仕置きだぜ！」

「何さらっとノリノリで恐ろしい事言ってるのっ！」

「お前には私の研究材料になってもらうぜ？ ちなみに拒否権は無い」

「阿呆かお前！ 何だ研究材料って！ そんな俺を殺したいかッ！」

「いや何安心してくれていいんだぜ。ちょっと体が敏感になる薬を三十個位飲んでもらいただけだから」

「何アブナイ事言ってるんだてめえ！ 敏感どころか空気にすら反応しちまうじゃねえかそんな飲んだら！ やっぱお前俺を殺す気だろ！」

「快感かもしれないぜ？」

「同じだろうがッ！ どっちにしろ耐えらんなくて死ぬわ！ お陀仏したら末の代まで呪ってやるからなッ！」

「おっ、という事は了承か」

「ちげええよ！ どこからどう見ても違えよ！ どんな耳したらそんな風に聴こえるんだよ！」

「そんな事言う口にはお仕置きだぜ」

「なんやねんお前ほんま！」

エセ関西弁。というかそんな事言いながら口近づけてくるんじゃないやねえ！

「お前は年頃の少年がどれだけ獣なのかを知らない！」

「私に敵うのか？」

「いや無理か」

「無理だぜ」

無理でした。

★	
☆	☆
★	★
★	☆
☆	★
★	☆
★	★
☆	★
★	☆
★	★
★	☆

「……さすがに手までも動かないとは思っていなかった」

何て呟きながら、アリスさんに肩を貸されて廊下を歩く。歩くといつても、膝からがくんがくんの蛸みたいになっっているので引き摺られているようなものだ。

アリスさんはもう大分慣れたようで、普通に喋ってくれる。というか俺が誤解さえさせていなければ、最初から良好な関係は築けただろうと思う。

「今から鍛えれば能力の限界が無くなるかもしれないわよ？」

「そしたら無敵でしょうね。いや、敵は出てくるから最強か」

「……敬語なのね」

「ええまあ、普段はコレなんで」

窓から差し込む昼の光を浴びながらそんな会話を繰り返し、昼食を食べる場所に移動する。

既に魔理沙さんが昼食を準備していた。

「おっ、動けるのか」

「何処を見たらそう言えるのか俺には分かりません。節穴ですか」

「毒舌だぜ」

「あんな事されたら……ね」

はははと魂の抜けたような笑みがこぼれた。

「嫌だったか？」

「男にとってあーんされるのがどれだけ屈辱なのか貴女は分かっている……」

朝食の時にあーんされて食べさせられたのは、忘れられない黒歴史に認定されるだろう。

羨ましいと感じていた若かりし頃の俺には拳骨を食らわせたい。

……あれは本当に屈辱だった。

そして今、昼食。

「さ……あーんして食べるか？」

「絶対いやだ」

にやにやした笑みを浮かべながら食べさせてくる魔理沙さんは、やはり魔女なのだろうと思った。赤ちゃんの時を思い浮かべると恥ずかしくなるが、それと同じなのだ。

……。

「顔真赤だぜ？」

「……いつか絶対仕返ししてやるから覚えとけよ」

六話 怪我の巧妙真につきまして（後書き）

短い。短すぎるッ！

高校受験中の作者にエールを！

七話 死を覚悟した嘔吐きの言葉

——俺は、間違いなく死ぬ。

心の底の隅からそう思えて仕方が無い。余りにも——出来すぎた舞台。背後からこちらに歩み寄ってくるのは、きっと魔理沙さんから忠告を受けた風見幽香本人に違いないだろう。

……今は秋だから、居ないはずだとは言われていたが、やはり俺は運の悪さに定評があるようだ。手入れの行き届いた土を踏む俺の足は、小刻みに震えている。制服が大きいからか、幸いにも震えているのを悟られる事は無いだろう。

さく。さく。さく。

小気味良い音を響かせている足音は、死神が旋風のようなだった。死神が——近づいてきているのが分かる。こんな事になるのなら、アリスさんにでも頼んで博麗神社に送ってもらうべきだった。ただの好奇心で——こんな事になるとは思っていなかった。

能力を使えば——なんてことは、自然と思わない。使っても、意味が無いのだ。空気を毒ガスに変えようと、空気を刃に変えようと、相手の攻撃を反射しようとも——意味が無い。圧倒的なまでの実力差があるのだ。だから——無理。

さく。さく。さく。

勿論逃げようとしても捕まえられるだろう。それ程までに圧倒的な存在だと、魔理沙さんに嫌になるほど聞いた。けれどまさかここまでとは——けれどまさか、ここまで恐ろしい存在だとは思わなかった。

全ての者を平伏させるような威圧感が、背後から注がれている。それは紫さんよりもキツく、けれどまだ本気ではないのだろう。ここで俺が土下座でもすれば――？ いや、駄目だ。そんな事をした瞬間に、首が吹き飛ぶ。

さく。さく。さく。

どうする？ どうすればいい？ 死ぬ訳には行かない。

「――こんにちは」

だからこそ――先手。振り返り、ぺこりと小さく頭を下げた。その仕草の中、若干微笑みを魅せている幽香さんが居た。瞳は紅色で、緑色の髪が淡く揺れているのが見えた。――下手に出るなど、愚の骨頂。

例え幻想郷最強であろうと――今は対等なのだ。

「こんにちは。こんな所でどうなされましたか？」

ごくりと、生唾を飲み込もうとした――それを押しとどめる。

緊張などして声が震えてしまえば、それは即ち相手を見上げる行為だ。そんな事をしてしまえば、俺の心はもう二度とこの人に立ち向かう事が出来なくなってしまう。

あくまで――対等だ。

「いや、迷子になってしまいましたね」

――口は上手く笑みを描いているだろうか？ こんな場面は久しぶりだ。二度とこんな腹の探りあいはいはないと思っていたが、やは

り分からない。

皮肉など言ってしまうえば首が即刎ねられるなんて場面——負け戦だろうに。

だが——強いからこそ、踏み込める。

「それはそれは、災難でしたね」

口調はあちらも普通だ。だがその節々から、何かが漏れ出している。

それは——弱者に対する威圧か。普通ならば感じられない程度の微弱な威圧——それが、恐い。

感じれない方がどれだけ幸せだっただろうか。やっていられない。

「ええ——本当に災難でしてね。そんな時にここが見えて、来てみたのですよ」

穴は出してはいけない。間違っても、穴は出しちゃいけない。そして——穴を見つけて決りこむ。

命賭け。

だからこそ——やる価値がある。

リスクの無い賭けに勝利などない。

リスクがあるからこそ——勝利を掴む事が出来る。

——何としてでも、この自意識過剰な妖怪を対等な存在に下げてやる。例えその後死ぬ事になったとしても、俺は妖怪に人間の恐ろしさを植え付ける事が出来るのだ。光栄な事この上無い。

魔理沙さんから聞いた通り、この妖怪が人間の事をそこらに転が

る石ころのようにしか思っていないのなら——俺は何としてでもその認識を叩き潰さなければならぬ。

それが、今出来る事。

「あら、そうなんですか。——それなら早く人里にお帰りになった方がよろしいかと思えますわ。この辺りには、恐ろしい妖怪が出るそうですから」

ふわっと、微弱な威圧が姿を現し始める。だが、俺は一步幽香さんに近づく。

「それはそれはおかしいですね——この辺りにはとても親切な妖怪が居ると聞いたのですが……果たして僕の聞き間違いでしょうか？」

吐きなれた嘘。

ぴくりと——幽香さんの眉が動いた。

「ところで——貴女は一体どうしてこんな所に？」

にこりと——笑みを浮かべた。先程まで微笑んでいた幽香さんの頬が、引きつった。

「少々、気晴らしの散歩でもと」

「ほう、ですが家に帰った方がいいですよ？　貴女の言う事が真実であれば、危険な事この上無いですから」

「そうですわね。そろそろお暇しようと思いますわ」

「そうした方がいいですね。僕も帰らなきゃならない」

——そして、動かない。俺の体も幽香さんの体も動かない。俺は、背後を見せればその瞬間に消し飛ぶだろう。だから、動いてはいけない。ただ、思考に集中する。目の前の空気を鋼の壁に変えるときが——必ず来るだろう。

「ところで——聞いていいかしら？」

口調が——変わった。

「何ですか？」

「その妖怪が親切だと言ったのは——誰なのかしら？」

空気を——

「俺ですよ」

鋼にッ！

瞬間、凄まじい金属音と共に砂塵が巻き上がり——目の前に固定された鋼が突き破られていた。たった一本の腕によって——破壊されていた。完膚なきまでに。

その時——体から何かが溢れ出ているのに気がついた。視線を下に向けると——腹が撃ち抜かれている。痛みは感じていない。内臓

という内臓がその穴から溢れ出てきそうで、思わず腹を押さえる。熱かった。じわりと、何か、熱した牛乳のような熱さだ。

「一つ——教えてあげるわ。その妖怪が私よ」

声。んな事は知っている。とうの昔に知っている。声は出るだろうか。大丈夫だ。この位の怪我をした位で、気絶などしない。

「そして、貴方のその能力は何かしら？」

砂塵が舞い降りると、そこには白かった右腕を血に染めた幽香さんが居た。アレが俺の血か。びっくりして驚き戸惑うほどに——魅惑的だ。我ながら見事な血。

そんな事を重いながら、足を肩幅以上に開いて胸を出す。

——仁王立ち。

「なに、ちょっとばかり変換しただけですとも」

「——そう、でも……全然ね。ああでも、腹を突き破られて悲鳴一つ上げない人間は貴方が初めてよ。最近の人間は根性が無いと聞いていたけど、そうでもないのね。外人だからかしら？」

「まあ、能力は最近身についたばかりですからねえ。あれ、やっぱ分かつちやいます？ 外人人って」

「妖怪が出るのにも関わらず人里から出る人間なんて——不死身と半獣しかいないもの」

「そいつは人間とは言えないですねえ。笑える冗談です、本当に」

「そういう割には笑ってないわね」

「笑えませんか」

そう言って笑う。

と、幽香さんは一歩近づいてきた。距離が更に縮む。凄まじい威圧感と、溢れ出てくる何かの力。そして獲物を嬲るような視線。その中に混じる殺気。

——そこで初めて、ごくりと生唾を飲み込んだ。同時に——変換する。

「——その体勢は止めないのかしら？」

「止める気なんてありませんよ。だからこそその仁王立ちなんですから」

「——何発、持つかしらねえ？」

その体勢と、根性は。

そう聴こえた瞬間には、左肩に尋常じゃない衝撃を受けて空中をくるくる回っていた。急な衝撃に、口からは血が漏れた。そのまま受身も取れぬまま、地面に墜落する。背中から落ちた為、傷が更に痛み出す。

ああ——もう、最近は何でこうも死にやすいんだろう。

何て思いながら、ゆっくりと——立ち上がる。

さながら亡者のように——。

さながら妖怪のように――。
さながら人外のように――。
さながら愚者のように――。
さながら幽霊のように――。

さながら人間のように。

「――貴方に、忠告だ」

そして、仁王立ち。真赤に染まる視界に映るのは幽香さん。
次の瞬間には――視界が反転していた。天地がひっくり返り、地面を泳ぐ。気がついた時には地面に顔面から突っ込んでいた。動かない肩が悲鳴を上げ、出血を止めない腹は奇声を上げる。息をするのが苦しい。肋骨が折れたのだろうか。何たる不幸だ。
ああ、吹き飛んだ理由がそれか。胸を両手の平で打たれたんだろう。その性で息が苦しく、血の臭いが止まらないんだ。

何て思いながら、ゆっくりと――立ち上がる。

さながら信者のように――。
さながら害虫のように――。
さながら犯人のように――。
さながら鬼畜のように――。
さながら病人のように――。

さながら人間のように。

「――弱者を見くびると、いつか足元掬われるぜ」

轟音。

同時に幽香さんの立っていた足元が爆発した。

先程、生唾を飲み込むと同時に地中の土塊を手榴弾に変換していたのだ。

きつと、舞い散る砂塵の中で幽香さんは俺に止めを刺さんとして
いるだろう。

今にも飛び散る儚い命に止めを刺そうとしているだろう。

だが――俺は、言ったのだ。

ただの虚言を――真言に変えたのだ。

残念。

俺の――勝ちだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837y/>

東方娛樂記

2011年11月25日21時01分発行